

私の日 中翻訳論

武吉次朗

一、日 中翻訳の歴史

飛鳥・奈良時代には帰化人の子孫が「音博士」を世襲し、漢音を教えたので、当時の知識人は漢文を音読でき、漢詩を自作できた。

平安時代に返り点やヲコト点などの訓点が登場し、漢文の訓読みが始まる。

江戸時代、唯一の対外窓口である長崎に、南蛮（ポルトガル語）通詞・オランダ通詞と並んで唐通詞が置かれた。彼らは役人であり、大通詞・小通詞・稽古通詞・内通詞などの職階に応じて禄高が決められた。

明治の文明開化期には、欧米の新しい思想・制度が日本語に訳されたが、西周等の訳者がいずれも漢籍の素養が深かったため、日本語の訳語が中国語にも取り入れられる現象が起きた。たとえば economics を清国では「富国策」「計学」「生計学」「資生学」などと訳されたが、孫文が日本語の「経済学」を採用するよう主張し、やがてこれに統一されたという。史有為氏の《汉语外来词》によれば、《现代汉语词典》に収録されている語彙のうち、日本語から入った可能性が大きいものは768あり、欧米からの721を上回るという。

その後1945年までの翻訳・通訳には侵略の陰影がつきまとっている。軍人の間では侮蔑感の強い「兵隊シナ語」が使われたし、旧満州在留日本人の間でもこれに似た「協和語」が幅をきかせた。

そして近年に至り交流の広がりや深まりにともなって、あらゆる分野で翻訳・通訳の需要が飛躍的に増え、プロも誕生している。

二、翻訳の定義と基準

広辞苑には「ある言語で表現された文章の内容を他の言語に直すこと」とあり、《现代汉语词典》には“把一种语言文字的意义用另一种语言文字表达出来”とある。私は遠藤紹徳氏の「ある言語で表現された情報を、別の言語の等価な情報におきかえること」というのが氏のいうように「各ジャンルの翻訳に当てはまる共通の無難な定義」と思う。一種の再創作である。

基準については、巖復の「信、達、雅」があまりにも有名だが、今なおこれを超える新基準は見当たらないようである。原文に対しては「信（忠実に）」、訳文については「達（滑らかに）」、そして「雅（美しく）」とは、原文の風格、

気品、持ち味を訳文であざやかに表現すること、とされる。嚴復によれば“文字の整洁流利，声调的和谐动听”となるが、ここまで到達するのは至難の技であり、欧州ではこんな“格言”まで登場する。Translations are like women... ..when they are faithful they are not beautiful, when they are beautiful they are not faithful. これを中国語では“翻译文好比女人 忠实的不漂亮,漂亮的不忠实”と訳しており、日本語では米原万里氏がいみじくも『不実な美女か、貞淑な醜女か』と題した本を出している。

ただ通訳の場合にはTPOがある。パ-ティ-の場などで「忠実さ」にこだわってはいは料理も雰囲気も冷めてしまうから、手早くさばくのがコツだし、外交や価格ネゴでは「忠実さ」を優先せざるを得ない。

三、翻訳のポイント

原文の理解力（背景の諸事情を含めて）と訳文の表現力がポイントであることは自明の理だが、中文日訳に限っていえば、漢文調から脱却し、こなれた日本語にすることがポイントになる。言い換えるなら、論理的な中国語と情緒的な日本語との格闘である。

芹洋子の「四季の歌」が一時期、中国でも流行ったが、肖兵の名訳に思わなくなった。「心きよき」を“心地纯洁”、「心つよき」を“意志坚强”、「心ふかき」を“感情深重”、「心ひろき」を“胸怀宽广”と訳しているのだ。日中辞典で「清い」を引くと“清彻,纯洁,洁白,纯真,清爽”「強い」は“强壮,强烈,厉害,坚强,擅长”「深い」は“深厚,深重,深沉,密切,深奥”「広い」は“广大,广阔,辽阔,宽敞,广泛”などとある。逆にいえば、中国語のこれら形容詞を訳すとき、やまとことばが思いつくか、ということになる。

大野晋氏は「日本語練習帳」で「明白な事実」「明確な意思」「鮮明な視界」「明晰な頭脳」を「はっきりした」という和語で統一できるという。私はかつて中国の視察団をある工場に案内した際、社長が「わが社のモット-は、物をつくり、富をつくり、人をつくることです」と挨拶され、とっさに“我公司的宗旨是,制造产品,创造财富,造就人才”と訳したが、これを統一した中国語動詞には絶対できないな、とつくづく感じたことがある。

和語は万能ではないが、和語の使い方に熟達することをぜひ心がけたいものである。

四、翻訳の基本テクニックと格調

二ヶ国語に通暁することをふまえ、翻訳特有の技法を駆使する必要がある。原文にないことばを付け加える加訳、その逆の減訳（不訳）、肯定形と否定形を入れ替える反訳（裏返し訳）、品詞や文の成分を変える変訳、前後をひっくり返す倒訳、一つのクロ-ズやセンテンスを分割する分訳、その逆の合訳の7つが基本になる。このような処理法があるということを知っておくだけでも、実際に翻訳する際に役立つ。

変訳について2点、補足しておきたい。

中文日訳の際には、他動詞をできるだけ自動詞に変えることが望ましい。金田一春彦氏は「あなた、お茶がはいりましたよ」という日常会話を、いかにも日本語らしい表現だとしているが、中国語ならさしずめ“我给你沏茶啦!”となるうか。

横川伸氏は『中国語』7月号で「大地をゆるがしとどろきわたる雷神のおたけび」を“雷神啊,你的吼声震撼了大地,响彻了四方”と訳し、「日本語の修飾語を中国語訳の述語として処理するのが和文中訳の基本」と指摘している（中文日訳ならその逆の処理になる）。

翻訳の格調のうち、通訳についていえば、発言者の立場・身分・性別・年齢などにふさわしい言葉づかいが重要であり、翻訳についていえば、登場人物の人間関係にも留意せねばならない。特に日本語はおとなとこども、男性と女性、目上と目下に応じて言葉を使い分けるので、細かな配慮が不可欠である。中国の四人組逮捕の経緯を訳した近刊に、葉剣英が華国鋒に「あなたが立ち上がって闘うべき」と諭す場面があるが、二人の関係から見れば「あなたが」ではなく「君が」とすべきであろう（原文は“你”）。

五、文化の相違の橋渡し

これについては、鳥飼玖美子氏が『歴史をかえた誤訳』で面白い例をあげている。太宰治の小説『斜陽』をドナルド・キンが英訳した際、華族夫人の往診に老医師が袴・白足袋の正装で来たのを「正装ではあるが、やや古めかしい旧式の和服」と訳し、白足袋で再度往診したときは「白手袋」と訳した。この処理をめぐって、「戦後の日本文学の英訳の中でも特筆すべき名訳」と絶賛する

人と、「英語文化圏の解釈系のままに書かれているのを理解するだけで、日本文化の中で白足袋がもつ意味が伝わらない」とする見解と、評価が真っ二つに割れた、というのである。

永田小絵氏もユニークな通訳体験をしている。日本人の化学者が「ネバネバして糸を引きます、ちょうど納豆のようです」と発言したとき、彼女が“好像拔丝山药”と訳したら、中国側の聴講者がいっせいにうなずき、それを見た日本人化学者は「中国にも納豆があるのですね！」と感心した由である。

通訳のとき、いちいち解説をつけることもできないし、翻訳でも学术论文ならまだしも、くわしい脚注をつけることは如何なものか。悩ましいところではある。

六、 翻訳者の条件と上達法

翻訳者の条件については、藤岡啓介氏が『翻訳は文化である』で次の6点を示している。

ものを書くこと、読むことにたけていること。

自分の専門分野を何か一つでも持っていること。

自分が得意とする外国語を母語とする土地で暮らしたり、何度も旅行した経験のあること。その地の文化に知識と理解があること。

その言語に人並み以上の知識があり、さらに複数言語を学習していること。

さまざまな専門知識のある友人を数多く持っていること。

何よりも翻訳が好きなこと。辞典や事典を惜しまず備えるだけの幸運のあること。

上達法の基本トレーニングとしては、河野一郎氏が『翻訳上達法』で縷々述べているが、要点は次のとおり。

あらゆる手段と機会を利用して、音声面からも英語（われわれの場合は中国語）に親しむ。英語（同前）のリズム感を自分のものにする。

読解力を高めるとともに、背景知識の吸収も心がける。映画を見るときもストリーを追うだけでなく、好奇心で観察する。

日本語の言葉の収集にたえず努める。母語の豊かさとレベルが最後の決め手になることを心しておく。

しゃれを使い翻訳することを訓練する。どのような原文でも訳してみよ

う、という基本姿勢を保つ。

他人の書いた文章を批判的な目で見ると。自分の書いた文章も他人に読んでもらい意見を聞く。

日本文学に親しむ。気に入った作家の文体が真似られるぐらい読んでみる。

辞書を気軽に引くクセをつける。さらに辞書には載っていない“語感”をつかむこと。

すぐれた翻訳作品を読むこと。これは自分の表現の幅を広げるうえで非常に役立つ。

文体創造の訓練に努める。性別・年齢・階層別により異なった表現を工夫する。

翻訳者自身に合った作家と文章を選ぶこと。得意とするレパ - トリ - を見つける。

七、私実感していること

私と中国語の関わりは、戦時中ハルビンの日本人中学校で「注音字母」を仕込まれたときに始まる。戦後両親を亡くし一人で中国人の中に飛び込み、ともに働き、学び、暮らす中で中国語を身につけ、いちいち頭の中で翻訳せずとも、中国語で入ったものは中国語で受け止め、日本語には日本語で反応できるようになった。あと何歳か小さければ母語を忘れたろうし、逆に何歳か大きければ舌も頭も固くなっていたらうから、外国語を学ぶ“適齢期”だったようだ。

貿易団体事務局で長年、通訳と翻訳を日常業務として取り組む中で、日本語と中国語の語彙を増やすとともに、両国語を結びつけるコツをしだいに体得した。英語 日本語に関する翻訳論も読んだが、ほとんど手探りの悪戦苦闘で、恥と冷や汗をかきながら会得していった。35歳を過ぎたころから「油がのってきた」のを実感できたが、これは人生経験を積むことで物事への理解力がついたからだろう。

振り返ってみると、外国語の習得はジェット機が一直線に上昇するようなわけにはいかない。階段を上ると同様に必ず何度も“踊り場”にぶつかり、スランプに陥る。何かをきっかけにその壁を突破すると、ゲンと上達していることが実感できる。この繰り返しで一步一步と上ってきた。

特に強調したいのは、翻訳は母語が決め手だ、ということである。後から学ぶ言葉は母語を超える筈もなく、どこまで近づくか、でしかない。翻訳のプロは、入門希望者にまず母語で何か書かせ、そのレベルで採否を決めるそうだが、むべなるかなと思う。

中国流に「三つの“お”」でしめくりたい。

翻訳はおもしろい。ピッタリの訳語を探り当てたときの快感を、一度味わったら病み付きになる。

翻訳はおそろしい。自分の語学力・知識から性格まで、すべてさらけ出してしまうのだから。

翻訳はおくが深い。まさに生涯学習である。日中交流が未曾有の広がりや深まりを迎えたなかで、その架け橋になるのが無数の、無名の翻訳者であり、一人一人は一本のネジ釘である。いつまでも錆びないネジ釘でありつづけたい。これが私の念願である。